

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩

Hack
For
Japan

第26回 「ITx災害」会議 (前編)

社会的課題をテクノロジーで解決するためのコミュニティHack For Japanの活動をレポートする本連載。今回と次回は2013年10月に開催された「ITx災害」会議の模様を前後編に分けて紹介します。

● Hack For Japanスタッフ
及川 卓也 OIKAWA Takuya
Twitter @takoratta
高橋 憲一 TAKAHASHI Kenichi
Twitter @ken1_taka

Hack For Japanは2011年3月11日の東日本大震災発生直後に活動を開始し、まもなく2年9ヵ月(執筆時点)になろうとしています。今までの活動の中には、成果を出せたものもあれば、かけ声だけに終わったものや、あまり効果的ではなかったものなどもあります。

また、私たちHack For Japanの活動はITを活用した復旧・復興支援の中でも「開発」に重きを置いたものですが、私たち以外にも多くのITを用いた復旧・復興支援を行っている団体やコミュニティ、そして個人がいます。

思いを同じとする人々が集まり、今までの活動を振り返るとともに、今後の活動を検討し、協力関係の可能性を検討するためにと企画されたのが、「ITx災害」会議です。

2013年10月6日に開催されたこの「ITx災害」会議の模様を今回はご紹介します。

きっかけと準備

2012年、Hack For Japanでは、復興支援などに対してITの力を活かして貢献したいという思いを持つ方と支援を必要としている方をつなぐための取り組みである、スキルマッチングを開始しました^{注1}。しかし、今に至るまであまり活用されていません。Hack For Japanの活動に賛同してくださっている人は多いものの、やはり開発者が参加者の多数を占めるHack For Japanのコミュニティだけでは協力関係構築が難しかったのではないかと考えられます。この課題はスタッフの中では認識され

ており、コミュニティの拡大やほか団体との連携などが以前から検討されていました。

そのような中、Hack For Japanに当初から参加いただいている方から、今までの活動を振り返り、ITによる復興支援のあり方を考える必要があるのではないかという声もあがってきました。

これらがきっかけになり、「ITによる復興支援のあり方会議」(当初、「ITx災害」はこう呼ばれていました)の準備会が発足しました。2013年6月末に行われた最初の準備会では30名近くの方が集まり、震災以降の取り組みなどが共有されました。お互いにそれぞれの存在は知ってはいたものの、直接話すのは初めてという参加者も多く、「つながる」という意義を再確認し、本会議への期待がさらに高まりました。

その後の準備会で、将来に起きうる災害に対しての防災や減災も話し合うことから、会議名を「ITx災害」会議(「x」は「かける」と読みます)とすることに決定しました。また、参加者全員に積極的に参加してもらうため、アンカンファレンスという形式をとることとしました。

アンカンファレンスとは、Software Designの読者であればすでにお馴染みかもしれませんが、あえて事前にセッション内容などを決めずに、当日に参加者自身に提案してもらう形式のカンファレンスです。通常のカンファレンスの場合、セッションで話す人と聞く人というのが明確に別れてしまいがちですが、アンカンファレンススタイルの場合はセッションのトピックを提案できますし、たとえばかの人が提案したトピックであったとしても、事前にス

注1 <http://blog.hack4.jp/2012/12/blog-post.html>

ライドなどが準備されていることはまれなので、全員が同じ立場でセッションに参加できます。

準備会は合計4度行われ、総勢20名以上のスタッフが手分けして準備を進める、文字どおりの手作りの会議として用意され、当日を迎えました。

午前の部： ショートスピーチ

「ITx災害」会議は10月6日に東京大学駒場リサーチキャンパスにて行われました(写真1)。参加者は112名となりました。この会議は招待制としたのですが、招待した方の9割以上が参加されるという大変高い参加率の会議となりました。

午前の部はイベントの主旨の説明と、これまで復興支援活動をされてきた10名の方からのショートスピーチが行われました(写真2)。



◎RCF復興支援チーム：藤沢烈さん

情報を復興に活用する3つのキーワードを紹介したいと思います。

1. ラストワンマイル～地域コミュニティ形成

「復興においてこそ、情報が必要である」

ラストワンマイルをつなぐために現地コーディネーターが必要

2. One to One～産業復興

被災者、被災事業者と支援者がOne to Oneで結ばれることが意味があり、持続的なかわりが求められる

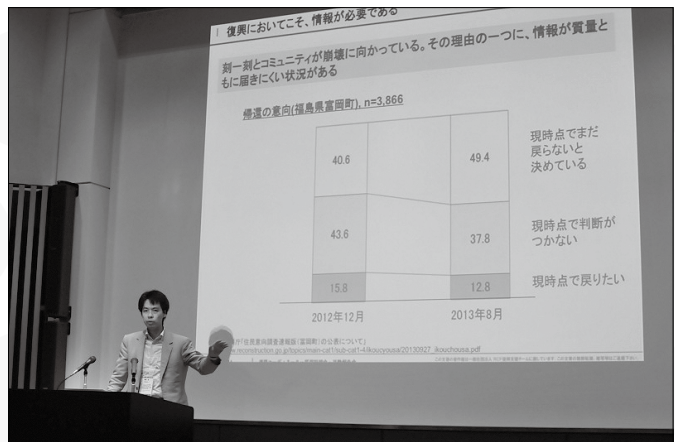
3. テーマ別のプラットフォーム～人材支援

今回の震災は被災地も多く、支援も多い。被災地と支援側のニーズを集約し、見える化するテーマ別のプラットフォームが必要

◆写真1 会場風景



◆写真2 ショートスピーチの様子



復興には10年以上かかり、まだ入り口の段階。引き続き東北を支えるためにも、情報の整理がたいへん大事だと思っています。



◎岩手震災IT支援プロジェクト：村山優子さん

災害時のネット接続支援の課題として、IT支援の重要性が必ずしも認識されないというものがありました。まず支援ありきのスタンスではダメで、相手が必要とするものを理解し、人や車が先、そのうえで情報交換が必要です。また、組織プロトコルも重要で管轄する部署への説得、なぜインターネットが必要か、今起こっていることをどうやって意思疎通するかということが大切です。できることから1つ1つ解決していくと信頼が出てきて、最終的には情報処理が必要だということがわかってもらえます。

Hack For Japan

エンジニアだからこそできる復興への一歩



◎さくらインターネット研究所：松本直人さん

写真からはたくさんのことがわかります。言葉は曖昧さを持っているため、より多くの視覚情報の共有、正確な位置情報、データ加工の容易さが大切です。とくにGPS情報付き写真は災害直後の復旧のときに有用となります。必要な情報がリアルタイムで手に入る環境づくりを見据えて、GPS情報付き写真を発信しましょう。常に自分でも情報発信することを心がけていると役に立つことがあります。



◎うらと海の子再生プロジェクト：小泉勝志郎さん

私自身が宮城県塩竈市で被災し、弟が携わっている浦戸諸島という離島の養殖業も壊滅状態となってしまいました。それを救うために始まったのが「うらと海の子再生プロジェクト」で、クラウドファンディングで1億8千万円を集め、現在はオーナーさんにほぼ返した状態となっています。

また、よくボランティアが集まらないという話を聞きますが、つらいとか大変という言葉ばかりでは誰も来たいと思いません。楽しい要素を伝える必要があります。たとえば浦戸は海の水物が豊富でそれを採ったり食べたりすることが楽しめるといった地域の魅力を伝えていけば、ボランティアも集まってくるのではないかと思います。



◎岩手医科大学：秋富慎司さん

スーパーコンピュータによる試算では揺れだけを計算して、津波を考慮していませんでした。それが岩手は大丈夫という当初の誤認識につながりました。情報の持つ怖さというものがあると思います。

また、災害後のフェーズは10のn乗の時間で考えることが大切です。

- 1時間：自分たちの安全確保
- 10時間：救助、救援の準備、情報収集
- 100時間：人命救助
- 1000時間：復旧活動
- 10000時間：復興活動

このように受ける側、送る側の双方がきちんと時間軸を考えていく必要があります。

情報のマネジメントの仕方によっては、嘘の情報でも本当の情報になってしまうことがあります。テレビで「かわいそうですね、ここの避難所」といったような取り上げられ方をした場所に支援が集中し、^{まだら}斑が発生します。また道路が復旧したという情報も、民間の利用により、自衛隊などが使えないことがあってはいけません。情報は魔物にも神にもなると思っています。



◎株式会社Eyes, JAPAN：山寺純さん

アメリカで盛り上がっているヘルスケアITの日本版を推進しており、Health 2.0 Fukushimaチャプターを務めています。昨年は医療ハッカソンも行いました。



◎情報支援プロボノプラットフォーム (iSPP)：岸原孝昌さん

被災地の情報サービスにおいてさまざまな取り組みが行われたと思うのですが、ちゃんと記録にとっておかないと次に進められません。そこで、地域と時系列、情報ツールが生きていたのか、提供されたものと必要とされた情報の差などについて情報行動調査を行いました。

災害発生直後はラジオが有効で、徐々に携帯電話、インターネットなどのメディアに移行していき、必要とされた情報も時系列とともに変わってくることがわかっています。まだ構想段階ですが、情報支援レスキュー隊のコンセプトを検討しています。



◎Code for Japan：高木祐介さん

Hack For Japanなどで行ってきたハッカソンはコミュニティ形成や問題への理解の促進には効果を発揮するが、継続したサービスに結びつけていくのは難しいと考えて始めたのがCode for Japanです。オープンデータを活用することで地域防災を推進していき、緊急時にスムーズな対応ができるように地域でのITコミュニティ作りを支援します。



◎イトナブ石巻：古山隆幸さん

震災後に街づくりの活動をしていく中で、ITを活用して若者たちが動けるフィールドを作っていくと始

めたのがイトナブです。支援を受け続けるだけではなく、自活できる人作り＝自立した産業の開拓サイクルを回していくという活動を目指しています。



◎IPA/WASForum：岡田良太郎さん

震災後、個人として社会継続のために自発的に行動した人々によるWeb上の支援サイトを調査したところ、地理情報を扱ったものが44%、人命を取り扱ったものが41%、さらに起案からリリースまで72時間以内のものが52%、さらに半数が3名以下のプロジェクトだったという統計が得られました。利用可能なデータがなくて苦労したという話もありますが、プライバシーの問題など、当時はスピードのことを考えて意識していなかったこと、なりゆきでやってはいけなかったことが、改めて考えると多々あるはずです。



参加証にひと工夫して 交流のきっかけに

会議では参加者間の交流を促すために、いくつかのしぐみを用意しました。その1つが参加証です。首から下げた参加証で、名前と所属がわかるというのはどのイベントでも良くある風景なのですが、今回の会議では、その参加証を自作してもらうようにしました。

実は、参加証をスタッフ側で用意し、受付でそれを受け取ってもらう方法にするか、事前に参加者に作ってもらうようにするかは、準備会でかなりの議論を重ねました。というのも、ただでさえ準備に時間がかか

り、当日の受付が混乱する可能性もある中で、さらにスタッフにも参加者にも負荷のかかる作業を追加する意味があるかが争点となったからです。

結果から言うとな大成功でした。PDFのテンプレートを用意し、参加者に項目を埋めてもらうようにした^{注2}のですが、それぞれ工夫を凝らしてさまざまな参加証を用意していただきました。図1、2は筆者(及川)の参加証をスキャンしたものです。

今回はPDFでテンプレートを用意したのですが、「開発」「運用」「インフラ」などの自分の専門分野に関しては複数選択可能としていたので、Acrobat Readerのレイヤー機能を利用して、該当する分野のレイヤーを有効にしてもらうようにしました。残念ながら、ITの専門家ではない参加者には難易度が高い操作だったようで、ふと気づくと、そこかしこにすべての分野の専門家というスーパーエキスパートがいるという状態になっていました。次回があるならば、この部分はWebのフォームに該当項目を入力することで、PDFが自動生成されるようなシステムを用意できればと考えています。

次号では後編として、お昼に振る舞われた芋煮の話と午後の部のアンカンファレンスについてレポートします。^{SD}

◆ 図1 参加章の例(表)

「ITx災害」会議		STAFF
名前	及川卓也	
所属団体	Hack For Japan	
自己アピール欄	コードでつなぐ。想いと想い http://www.hack4.jp ハッカー精神で日本と世界をより良く！オープンデータ&プログラミング教育	
開発	運用	インフラ
情報発信メディア	研究	その他

◆ 図2 参加章の例(裏)

「ITx災害」会議		STAFF
会議の主旨 「ITx災害」会議とは、 「ITx災害」に関わる人たちがつながり、 組織や立場を超えて知恵や情報を共有し、 意見を交わし、これからの考える「場」として 開催するものです。		
タイムスケジュール 09:30～10:00 受付 10:00～11:30 午前の部: これまでの「ITx災害」にまつわるショート・プレゼンテーション アンカンファレンスへのトピック提案(各自、所定のボードへ) 11:30～13:00 昼食の部・芋煮会: 芋煮会を楽しみながら、交流を深めると共に、どのセッションに 参加するかをご検討いただきます。 13:00～17:30 午後の部: アンカンファレンス・セッション		

注2 <http://www.itxsaigai.org/20131006/namecard.html>